

映像メディアにおける 「民俗」の表象とその受容

石川県鳳至郡門前町七浦地区を中心として

Representation of "Folkway" on Television
and Reception by Represented People

川村清志

はじめに

- ①映像メディアと「民俗」
- ②番組の中の「民俗」と「地域」
- ③捨象された「現実」への視点
- ④映像メディアの受容と相互交渉の中の表象

おわりに

【論文要旨】

本稿は、映像メディアにおける「民俗」の表象と受容について議論し、「民俗メディア論」への視座を構築するための予備的な作業を行うことを目的としている。ここでの議論は大きく分けて4つの手順を踏むことになる。

まず、「民俗」の錯綜状況を理解するために、地域の祭りと生業を取材した、あるテレビ番組に焦点をあてる。番組で表象される「民俗的なもの」についての検証を行うことで、そこでの表象の修辞法と現地との乖離を指摘する。これらの記述は、「民俗」を継承しているはずの地域社会が、現代のメディア網の直中に配置されている状況を明確にするだろう。次に地域を自立的な固有のシステムとみなす基本的な視座に異議を唱える。それらが民俗学的なまなざしと根深い共犯関係にあることを考慮しつつ、それとは別の視点を示唆する糸口として、これまでの地域社会の表象からは捨象されてきた地域外部との有機的な結びつきや、そこでの重層的な経験を統合していく主体の柔軟性に注目する。

そのうえで地域の人々による映像メディア（やその取材）の「受容」の問題について考えていく。ここでいう「受容」とは、番組の視聴率やその全体的な評価を意味しない。そこにはすでに番組を一貫した作品として固定し、情報がどの程度「正確に」伝達されているかを確定しようとする視点が内在している。むしろ、彼らの生活の一局面で享受される番組のあり方や、日常的な会話やうわさのレベルで浮上する番組の位置付けに注目する。最後に、より今日的な課題として、マスメディアと地域との相互交渉の問題に注目する。そこでは地域の側が発信するインターネットの中での「民俗」の生成を指摘しつつ、それらとマスメディアとの重層的な関係性について検証していきたい。

キーワード：映像メディア、民俗表象、受容、交渉、インターネット